

ミヒヤエル・エントの『モモ』がちよつとした「ホーム」になつてゐるらしい<sup>(注1)</sup>。

札幌駅前の紀伊國屋書店二階左奥に子供のコーナーがある。歳の離れた子供があるので、時々岩波少年文庫を探しに行く。何年か前、モモなんていうちょっと

変わった名前の本を手に取つた。一九七三年にドイツで出版されたファンタジーと書いてあり、私も娘もどりこになつた。でもちよつと難しいと娘。最近またまNHKの衛星放送をみていたら、ポストコロナ社会をめぐって、この本が取り上げられていた<sup>(注2)</sup>。論者は流行りの経済

思想家の斎藤幸平のほか、独立研究者の山口周、医療人類学の磯野真穂である。みんな変わつた肩書きだ。キーワードはもちろん、「時間」。この本のあらすじはこんな感じである。

モモはイタリアらしい国の街はずれにある田形劇場の廃墟に住み着いた、昔で言えば浮浪児。彼女は天真爛漫で、「施設」なんかは大嫌い。気ままな生活を送っている。あの子はなんだろうと白い田で見ていた近所の大人や子供たちは、モモの不思議な力に魅せられ、集まつてくる

## み 観察

# 時間どりぼくの話

一般社団法人 北海道地域農業研究所  
所長 坂下明彦

ようになる。彼女は誰の話もじーと聞いてくれ、聞いた方が自分で納得し、その時間が楽しくなつてしまつからだ。ところが、なぜか周りの大人们は時間を気にする生活をおくるようになる。そつ、灰色の男たち、時間どりぼくの陰謀が始まつたのである。彼らは灰色の長いコートに山高帽をかぶり、アタッシュケースを持ち、いつも葉巻をふかしている。モモはその陰謀に気づき、子供たちと「モモをするが、時間泥棒たちに目を付けられ追い回される。そこに現れたのが、一匹のカメ カシオペイア。このカメが時間を司る神様 ホラの下へとモモを導く。

そこでモモは莊厳な「時間の源」を見せられる。この時間の国から戻つたモモは、子供たちや一人の大人の友達までもが男たちの手中にあることを知る。再び時間の国へ導かれたモモは男たちに包囲されるが、マイスター ホラの意表を突く作戦

を一人で実行する。男たちが吸っていた

葉巻は人間から盗み取った時間の花でできており、それを失つた男たちは海の藻屑のように消えていった。こうしてみんなに「時間」が戻つてくる。大人たちはせかせかした生活をやめて時間を楽しむようになり、子供たちも塾から開放されて天真爛漫を取り返すのである。

「物」で「うど、時間泥棒とは誰だ」というのがこの「寓話」の強烈なインパクトである。そして、コロナ禍を契機にわれわれはこれまでのせかせかした生活を見つめ直し、新しい生活のあり方を考えるべきだ、というのが本をめぐつての三人の論者の共通した主張であった。なぜなら、われわれはコロナによって生活空間を奪われ、閉じ込められたあり余る時間の中でこれまでの強制された時間の過ごし方を反省せざるを得なかつたからで

ある。

ポストコロナを考える場合、生活空間と生活時間、そこでの人間活動のあり方が問題となるが、(1)では七十にあやかつて時間について考えてみたい。といって私は思想家でも哲学者でもないので、統計を読み解くことにする。材料は総務省の『労働力調査』である(注3)(注4)。

(1)の統計の対象とする期間はオイルショック前の一九六八年から六〇年間である。内容はきわめてシンプルであり、図1に示したように、就業者数、週当たりの平均就業時間、この両者の積である延週当たり就業時間の累年統計である。(2)の図を見る前提として、図2で就業者数の動向を見ておこう。この統計は一九五三年からとれるが、就業者数は一九五五年で四、〇〇〇万人、一九六〇年代末で五、〇〇〇万人、一九八〇年代末で六、〇〇〇万人、そして一九九〇年代中頃にピー

クの六、五〇〇万人となる。その後は足踏みである。戦後すぐの就業者はまだまだ自営業とその家族が多く、農業就業者は一九五〇年代初頭の一、五〇〇万人から一九七〇年には八〇〇万人にまで半減するが、都市部の町工場や小商いなどの自営業者・家族は八〇〇万人から増加を見せ、一九七〇年代末には一、〇〇〇万人を超える。とはいって、その後は両者ともに減少を続けていく。これに対し、雇用者(サラリーマン、一部役員)が五〇%を超えるのは一九五八年であり、七〇%を超えてサラリーマン社会となるのはオイルショック後の一九七五年である。(2)のところから団地住まいが一般化して、専業主婦が増えた。が、就業者の男性比率はこの時期に増えはせず、当初の七二%から一九七〇年代半ばには六八%、一九八〇年代末には六〇%を割り、現在は五五%まで減少している。逆に言えば女

性比率が一貫して増加し、現在は四五%になつてゐる。ロングスパンで見ると、当たら前と見つかる。女性の就業率の成立はさうじるものではない。自営業

の労働力が外部化・商品化されたわけで

このように、就業者数はほぼ頭打ちになつてゐる。男性の就業人口は二、一〇〇万人

は減少に転じる。一九六〇年代末の週当たり一四億時間から一九億時間まで増加したが、この一九九〇年をピークに一九九〇年には三億時間にまで一〇%

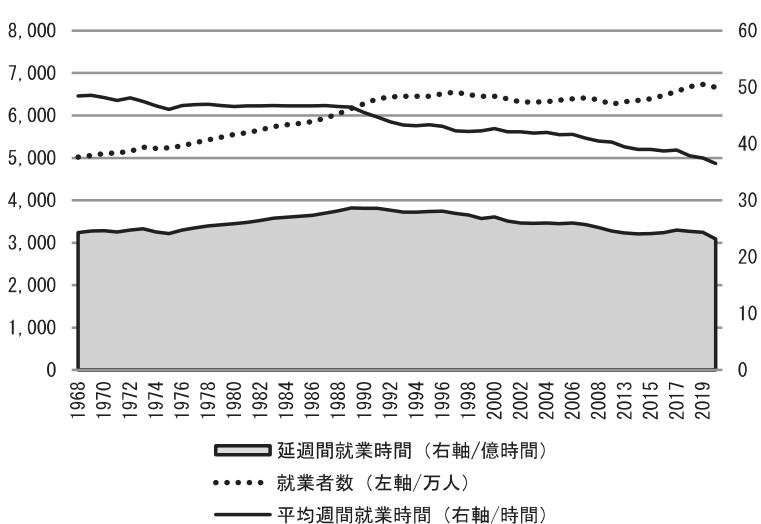


図1 延週間就業時間の動向（全産業）

注1) 総務省『労働力調査』基本集計・全国・年度次・累年統計により作成。

2) 1999年以前は延時間がないので、週平均時間に就業者数を乗じて計算した。

3) 2010~12年は東日本震災の影響でデータなし。

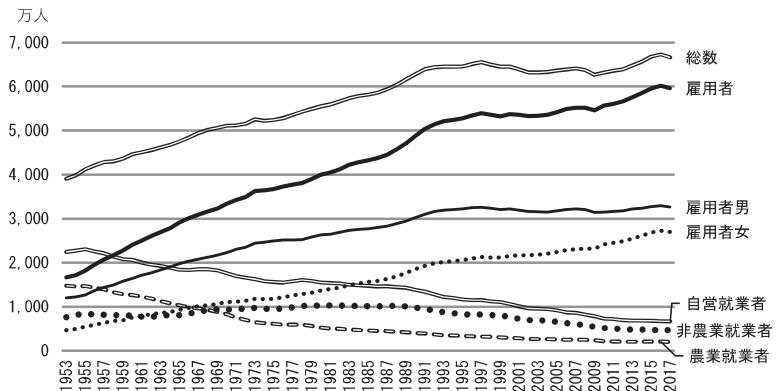


図2 全国の就業者数の変化

注)『労働力調査』基本集計・全国・年度次・累年統計・表1-1-2より作成。

で前後している。これに対し、減少しているのが一人当たり平均就業時間である。一九六八年には週四九時間で、八年には週四七時間であったが、一九七〇年代には週四七時間となり、一九九〇年から一九八〇年代には週四九時間となる。代半ばから一九八〇年代には週四七時間となる。一方で、一九九〇年から一九九〇年代末の週当たり一四億時間から一九億時間まで増加したが、この一九九〇年をピークに一九九〇年には三億時間にまで一〇%減へた。一方で、就業者数はほぼ頭打ちになつてゐる。男性の就業人口は二、一〇〇万人になり、女性の就業人口は二、一〇〇万人

も減少している。これは日本経済の活力が失われた三〇年間に対応している。

話はずれたが、週の平均労働時間の減少は、労働政策の動きに対応している。労働基準法の改正で一九八七年には法定週労働時間が四八時間から四〇時間へと改訂され、一九九二年には完全実施されることになる。決定的だったのは、学校への週休一日の導入であり、一九九一年に月一回、九五年に二回、二〇〇一年に完全週休一日となり、土日休みが社会化される。(注)して一〇一三年には就業時間は週四〇時間を割り、これは現在まで下がり続けており、一〇一〇年は三六・五時間である。(注)した週当たりの労働時間の傾向的低下は福祉国家的な施策と結びついており、「余暇」という言葉が生まれ、狭義の生活時間の充実へと向かうかに見えた。

しかし、新自由主義的な経済政策のも

とで労働政策は狙い撃ちにあつ。その結果が格差社会の出現であり、一九七〇年代半ばに成立した生涯雇用、年功序列型賃金体制は崩れ去り、就業時間の短縮からその確保へと「時間」の位置づけが大きく変更されてしまった。ポピュリズムふんふんの「働き方改革」という政策もあきれるばかりである。労働時間の見直しも前途多難である。

もう一つ、生活空間にかかわって、最近発表された一〇一〇年の国勢調査結果がやや衝撃的だったので、紹介しておこう。世帯数の動きである。一般世帯数は一〇〇〇年の四、七〇〇万世帯から一〇一五年には五、三〇〇万世帯ぐ、さらに一〇一〇年には五、六〇〇万世帯にまで増加している。(注)一五年からの増加は一人世帯と二人世帯のみであり、しかも一人世帯は一、一〇〇万世帯と人数規模別世帯でトップであり、全体の三八%を

占めている。家族ではなく、独り住まいの世帯が増加しているのである。六五歳以上の独居高齢者が多数と考えられがちだが、実は六七〇万世帯、三三一%に過ぎず、四〇歳未満が六一〇万世帯、一九%、四〇歳から六四歳が六〇〇万世帯、一八%であり、一人住まい世帯は今やすべての年代で増加しているのである(注)。

以上のように、社会が全体として個々人の労働時間を削減して広義の生活時間の質の転換を図るという流れは職の安定確保を前提とした議論であった。しかし、現在のように不安定就業者の割合が増加する状況下では、就業確保、つまり賃金確保が先となっている。このような格差の是正には所得再分配政策が必要であり、ベーシックインカムの導入が議論されている。とはいって、新政権の新しい資本主義もかなり眉唾物であり、労働時間と狭義の生活時間のバランスの実現の見通

しはかなり遠く見える。少し触れた生活

空間の重要な単位である家族も一人世帯の増加で空洞化しつつある。豊かさの追求はなかなか難しい。

ただし、社会が確実に変化している

とも事実であり、ワークシェアリングや生活本位のライフスタイルなど変わるとこには確実に変わっている。当研究所では、自主研究として「コロナ禍を契機とした新しい生活様式の構築－農村からの提言」を開始している。研究の枠組みもできつつあるが、すでに紙幅も超過しているのでまたの機会に紹介したい。

紀伊国屋書店では、岩波ジューニア新書は「階の子供コーナーから一階に移され、大人の新書顔負けの存在感となっている。岩波少年文庫もたまには手に取って、子供のころのワクワク・ドキドキの冒険心と素直な正義感を取り戻したいものである。

#### 注

(1) ミヒヤエル・エンドケ『モモ』岩波少年文庫<sup>127</sup>、一〇〇五年、他に『はてしない物語』上下、同<sup>501-2</sup>、一〇〇〇年、

『魔法のカクテル』同<sup>249</sup>、一〇一九年などがある。

(2) 調べてみると、この番組以前にNHK教育放送の「100分de名著」のなかで、『モモ』が河合俊雄の解説で取り上げられている。『NHK100分de名著』NHK出版、一〇一〇年八月を参照のこと。

(3) 長期時系列データ、これは、毎日新聞の記事で同志社大学の服部茂幸教授が使っていた統計である(一〇一一・一〇・一八)。アベノミクスを批判して、近年の雇用拡大は労働時間の増加を伴っていないという根拠に使っている。

(4) 就業時間に対し、生活時間統計も存在している。『社会生活基本統計』(総務省)であり、一九七六年から五年おきに実施

されており、一〇一六年まで公表されている。生活行動と生活時間が内容であるが、紙幅の関係で紹介は難しいので、別の機会に譲ることにする。

(5) 『令和一年国勢調査 人口等基本集計結果の概要』総務省統計局、一〇一一。

一人世帯については、人口等基本集計、表11-1から計算した。